

【旧約聖書日課】イザヤ書 40章12～17節

12 手のひらにすくって海を量り

手の幅をもって天を測る者があるか。

地の塵を升で量り尽くし

山々を秤にかけ

丘を天秤にかける者があるか。

13 主の霊を測りうる者があるか。

主の企てを知らされる者があるか。

14 主に助言し、理解させ、裁きの道を教え

知識を与え、英知の道を知らせうる者があるか。

15 見よ、国々は革袋からこぼれる一滴のしずく

天秤の上の塵と見なされる。

島々は埃ほどの重さも持ちえない。

16 レバノンの森も薪に足りず

その獣もいけにえに値しない。

17 主の御前に、国々はすべて無に等しく

むなしくうつろなものと見なされる。

【使徒書日課】テモテへの手紙一 6章11～16節

11しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。12信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。13万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなされたキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。14わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで、おちどなく、非難されないように、この掟を守りなさい。15神は、定められた時にキリストを現してくださいませ。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、16唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 14章8～17節

<sup>8</sup>フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、<sup>9</sup>イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。<sup>10</sup>わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。<sup>11</sup>わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。<sup>12</sup>はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。<sup>13</sup>わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。<sup>14</sup>わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。…」

<sup>15</sup>「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。<sup>16</sup>わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。<sup>17</sup>この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。」

## 《父・子・聖霊》【こども説教のために】

先週「ペンテコステ（聖霊降臨祭）」を祝った教会は、今日、「三位一体主日」を記念しています。「三位一体」とは、「父と子と聖霊」とお呼びする神のことです。教会が「父と子と聖霊」とお呼びする神を礼拝する者たちの集まりであることを言い表しているのです。

「父・子・聖霊」は、主イエスが「天の父」とお呼びになられた神と、「天の父」の「御子」として地上を生きられた主イエスと、主イエスが天に昇られる前にお約束くださって弟子たちに与えられた「聖霊」を指しています。三つの別のものを指して言われているようですが、教会は、「父と子と聖霊」で「一人の神」を指していると教えてきました。「天の父」と「御子」は御言葉と御業において一つ、「聖霊」を与えられた者も、「天の父」と「御子」の御言葉と御業において一つ、と主イエスがお教えくださったからです。

何よりも、わたしたちは、神を「父と子と聖霊」とお呼びするとき、主イエスに従って共に生きようとしている者たちであることを互いに言い表しています。「三位一体」は、「御子」である主イエスに従って「天の父」の御心を行う「神の子ら」として共に生きる者たちの合言葉なのです。

## 「神の人よ！」

「聖霊降臨」の祝いの日に「赤色」で飾った礼拝堂が、「三位一体」を記念する今日は、「白色」で飾られています。

教会暦を期節ごとの「典礼色」（シンボルカラー）で表す習慣では、「白色」を用いるのは「降誕祭」と「復活祭」の祝いの期節です。どちらの祝いも、御子によって御業を行ってくださった御父と御子のご栄光を表して「白色」を用いるのです。ところが、「降誕祭」や「復活祭」と並んでキリスト教の三大祭と数えられる「聖霊降臨祭」に用いるのは、「赤色」です。「聖霊」を表すだけならば「白色」で良さそうですが、「聖霊降臨」を表すために「赤色」となったのでしょうか。「聖霊降臨」は、「聖霊」がわたしたち「人」に与えられたことを記念する祝いだからです。「人」の肉体に流れる「赤」い血、その血を充たして「赤」く染まるわたしたちの肉体、唇や舌などに、御父のもとから遣わされた「聖霊」が満たされている。「赤色」に染まったペンテコステの日の礼拝堂で、わたしたちは、そのことを祝ってきました。

その「聖霊降臨」の祝いに続く日曜日に記念されてきた「三位一体主日」に、わたしたちは再び「白色」に飾られた礼拝堂に招かれてきました。「聖霊」もまた、「父と子」と共に栄光に輝く神の御名であることを憶えるためです。それはまた、「聖霊」を与えられ、「聖霊」と共にいるようにされ、「聖霊」が内にお働きくださることを知るようにされたわたしたちも、その「白色」で示される栄光にあずかるものである、ということなのです。

畏れ多いことのように思います。けれども、その畏れ多いことを大胆にも信じるようにしてくださったのが、主イエスというお方です。弟子たちを通して、わたしたちも、この畏れ多いことを信じて生きる者とされてきました。主イエスと共に「神の子」として生きる者とされてきました。

使徒パウロは、「あなたがたは、人を…神の子とする霊を受けた」（ローマ 8:15）と教えています、「この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」（同）と。そして、その「神の子ら」の一人として人々の前に立ち、自分の信仰を言い表す働きを託されている者に、「**神の人よ**」と呼びかけています。「神の子」として、また「神の人」として、それにふさわしい生き方、振る舞い方をもって人々の前に立ち続けるように、励ましています。それが、主イエスに従い、倣う者の生き方だからです。

「三位一体」の記念の日、「父と子」と共に栄光の輝きにあずかる「聖霊」を与えられた者として、わたしたちは、畏れ多くも、世の人々の前に立つように促されています。この地上で「赤」い肉体を帯びる者でありながら、「父と子」の輝く栄光に照らされた者として、わたしたちの姿は、すでに「白」く光り輝くようにされているのです。

## 一緒にいる！

もちろん、わたしたちがそれを拒んで背を向けるならば、光り輝く「白」は、いつでも反転して暗い影に包まれてしまうことでしょう。わたしたちの「赤」い肉体は、暗い闇に覆われて姿を隠すことを好みがちなのです。

いいえ、わたしたちは、暗い闇の中に身を隠すことを好まないとしても、いつも「父と子」の御顔を見上げ、光り輝く栄光に照らされていることを望んでいるとしても、なお、自分の中に暗い影があることを認めないわけにはいきません。振り返って、自分の背後に伸びる真っ黒な影を見ると、それがほかの誰でもない自分の持つ一面なのだ、知らなければいけません。悲しいかな、わたしたちの「赤」い肉体の為せることには、限界があるのです。「神の子」として十分に果たせないことがあるのです。

先週、平日の集会を1階で開催しているまさにその時間帯に、教会のすぐ前の通りで、痛ましい事故が起きました。自動車に乗っていた幼児が、頭を窓に挟まれて亡くなったのです。教会のすぐ前で救急搬送されました。辺りが騒然としていることには気づいていましたが、集会に気を取られていて、わたしたちは何が起きているのか分からないまま過ごしてしまいました。詳しいことを知ったのは、テレビなどで報道されてからです。もちろん、すぐに気づいたからといって、わたしたちにできたことは、たかが知れているかもしれません。それでも、気づいて、そこで起きていることに目を向け、当事者のことを憶えて祈ることはできたでしょう。それが、当事者にとっては少しも励ましや支えにならなかったとしても、わたしたちがどのような者であろうとしているのかを示すことはできたでしょう。主イエスが嘆き悲しむ者、死に行く者の傍らにおいでくださったように、使徒が「泣く人と共に泣きなさい」（ローマ 13:14）と教えたように、わたしたちにも、為すべきことがあったはずなのです。

それでも、わたしたちはなお、「神の子」として生き、世の中でその生き方を証しすることを諦めはしません。あの主イエスが、「永遠にあなたがたと一緒にいる」とおっしゃってくださるからです。主イエスのお姿がたとえ見えなくても、「真理の霊」が「永遠にあなたがたと一緒にいる」とお約束くださっているからです。

自分が栄光の光に照らされることを拒むときでさえ、わたしたちは、「聖霊」を受けた教会の交わりに留まるならば、互いの姿がなお「父と子」の光り輝く栄光に照らされていることを、見ることができるでしょう。自分を信じることはできなくとも、天の父を信じ、主イエスを信じ、互いの者に与えられ共にいてくださる聖霊を信じることは、できるでしょう。同じ聖霊が、わたしたちにも与えられていることを、信じてよいのです。